



新たな共生型の地域社会を目指して

山田 修村長 二期目の村政をスタート

山田村政の二期目がスタートしました。4年間ずっと地域を歩いてきたからこそ感じたこと…。もう一度、「地域コミュニティ」を再生したいとの強い思いを込めた、新しい「共生型の地域社会」づくりに向けて、山田修村長が所信を表明しました。

任期満了に伴う村長選挙で、無投票で二期目の当選を果たした山田修村長（56歳、村松在住）が、9月21日に初登壇しました。

山田村長はこの日、役場で職員に向けて、あいさつをしました。その中で、「大切なのは、今、村が何を推進しようとしているのかという視点を常に持つことと、チャレンジする姿勢です。また、本村に適したやり方を見つけるためには、職員各自の創意工夫が必要です。喫緊の課題も多く、引き続き、私が先頭に立って汗をかいていく覚悟です。皆さんも一緒に一丸となって取り組んでいきましょう」と、二期目に懸ける新たな決意や思いを言葉にしました。



二期目の新たな挑戦

東海村長 山田 修

一期目の任期を無事に終え、多くの皆さんからの力強いご支援を賜り、引き続き村政運営を担わせていただくこととなりました。

「新たな共生型の地域社会づくり」

これまで「持続可能なまちづくり」の実現に向けて取り組んできました。しかし、それは「地域コミュニティ」が機能してこそであり、社会環境が変化し、価値観が多様化する中では、その機能の維持が困難になると感じるようになりました。そのため、「新たな共生型の地域社会づくり」が必要ではないかと考えました。「共生」というキーワードには、「人とのつながり」や「自然との調和」などの思いを込めています。住民同士が地域づくり活動に参加できるような仕組みを作り、地域の特

性を活かした新たな地域づくりを、皆さんと一緒に考えながら作り上げていきたいと思えます。そして、もう一度本村の「地域コミュニティ」を再生したいと強く願っています。

また、本村の将来を考えると、人口減少や超高齢化などの社会環境の変化は避けられない状況です。これらを見据えて、「第5次総合計画後期基本計画」や「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を推進していますが、中長期的な視点での将来ビジョンが描き切れていないとも感じています。

そこで、少し先を展望した「まちづくり」の考え方を2つほど提示させていただきたいと思えます。

「住み続けたいまち」を目指す

本村の豊かな自然環境を次の世代へ引き継いでいきます。単に自然だけを残すのではなく、皆さんに興味関心を持つてもらいながら、快適な生活環境の維持向上とのバランスを保つことが大切です。中央土地区画整理事業は、都市開発と緑化推進が共存するシンボリックな街づくりとすることが可能であり、生活基盤としてのインフラ

整備も引き続き必要になります。国道6号線の4車線化は、防災や産業・交流の面からも、早期実現を目指し、地域の皆さんの協力も得ながら、取り組みを加速化させたいと考えています。

「サイエンスヴィレッジ」を目指す

原子力科学研究は他の自治体にはない大きなポテンシャルです。これをまちづくりに活かすため、「原子力サイエンスタウン構想」を推進してきましたが、皆さんとの関わりの部分で成果が見えず、理解が深まっていないのではと感じています。原子力科学研究のもたらすメリットは学術研究だけではなく、産業界や人材育成など、メリットを地域にもたらすような取り組みも進めなければならぬと考えます。また、この地域資源を観光振興の分野にも活用するため、関係機関とも連携して効果的なアピールを検討していきます。さらに、原子力科学研究に興味を持つ学生等を本村に呼び込むため、大学院キャンパスを誘致したいとも考えています。

こうした将来ビジョンの具現化までには、ある程度の時間を要しますが、新たなまちづくりの方向性として、積極果敢に取り組んでいきます。今後とも、あらゆる課題に対して全身全霊をかけて村政運営にあたる所存です。村民の皆さんのご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

まちづくりの考え方

1. 「住み続けたいまち」を目指す

豊かな自然環境の保全に配慮しつつ、生活基盤となるインフラ整備をバランスよく進めます

- ①神楽沢近隣公園から「絆」北側緑地を都市緑化のシンボルへ
- ②国道6号線の4車線化や幹線道路整備による生活環境の維持向上

2. 「サイエンスヴィレッジ」を目指す

原子力科学研究の推進に貢献するとともに産業界と人材確保に「プラスα」を創造します

- ①原子力科学研究の産業界や人材確保、観光振興への活用
- ②茨城大学等との連携強化による大学院キャンパスの誘致